



夢遊ハワイ(夢遊夏威夷/Holiday Dreaming)

2006(平成18)年8月25日鑑賞(東宝東和試写室)

監督・脚本=徐輔軍シューフーチュン / 出演=楊祐寧トニー・ヤン / 黃鴻升ホワン・ホンセン / 張均甯チャン・チュンニン / 黃泰安ホワン・タイアン (IMX 配給 / 2004年台湾映画 / 100分)

……この台湾映画はあくまで「夢遊」ハワイだから、その舞台は本場ハワイではなく、台湾東部の海辺のまち花蓮。台湾にも韓国と同じく兵役の義務があるが、除隊間近の2人の主人公を中心とする4人の男女が織りなすちょっと変わった雰囲気青春群像劇は、ゆったりとしたもので、いかにもハワイ的……？ ヒロインを精神を病んだ女子学生と設定したところがミソだが、さてその可否は……？

台湾にも兵役の義務が……

韓国に兵役の義務があることはよく知られているが、それは台湾でも同じ。そしてそれは、中台の軍事的緊張関係(?)を思い浮かべれば当然。この映画における2人の主人公は、2年の兵役の終了を間近に控えたアーチョウ(楊祐寧)とシャオグエ(黃鴻升)。

映画の冒頭、この2人の軍隊生活の様子が描かれるが、アーチョウは夢の中で小学校の同級生のチェン・シンシン(張均甯)が海辺の砂浜で死んでいる夢を見て、これは何かの暗示かと心配している様子……？ 他方、シャオグエは近くのピンロウ売りの娘と仲良くなっているプレイボーイ(?)で、毎日彼女が柵の外から投げ込む差し入れを受け取っている他、休憩時には彼女に会いに行っている様子……。

こんな姿を見ていると、台湾の軍隊はわりとノンビリしているのかな、そしてホントにこれで中国人民解放軍とまともに戦えるのかなと心配に思えてくるが……？

問題児はクンフー

アーチョウとシャオグエの2人は一応軍隊に順応しているが、1年後輩のノロマで巨漢（ブタ？）の青年クンフー（ホワン・タイアン 黄泰安）が問題児……。クンフーはグラビア写真に載っている彼女に振られたと言って嘆いているが、そもそもこの写真の主がホントに彼女かどうか怪しいうえ、やることなすことがすべてピント外れだから、いつも問題を起こしてばかり……。アーチョウとシャオグエはこんなクンフーをバカにし、いじめて楽しんでいたが……？

ところが今回は、問題児というレベルをはるかに通り越して、何とクンフーは銃を持ったまま脱走を……。こりゃ大ゴト！

そんな中、「士官」からアーチョウとシャオグエに与えられたのが束の間の休暇。ホントかなと喜んだ2人だったが、実はそれは休暇に名を借りて、憲兵隊が動き出す前に早くクンフーを捕えて来いという「命令」だった……。しかし、除隊間近の2人が、素直にそんな「命令」に従うのだろうか……？

精神を病んだヒロインの可否は……？

この映画はハワイが舞台ではない。ハワイはあくまでタイトルどおり「夢遊」のもので、実際の舞台は台湾東部の海辺の花蓮。また、この映画はアーチョウとシャオグエの2人を中心とする青春群像劇だが、海辺を舞台としているだけに軍隊とはちょっと異質のスローでのんびりとしたハワイ風のもの……。そして、青春群像劇にはヒロインが不可欠だが、この映画のそれはアーチョウの同級生のチェン・シンシン。ところが、アーチョウが小学生時代に通った歯医者さんのやさしい一人娘だったチェン・シンシンは、アーチョウが夢の中で見たように死亡こそしていなかったものの、勉強をやりすぎて精神を病み、今は精神病院に入っていた……。せっかく前途有望な新人の美人女優を起用するのに、精神病患者役はちょっとかわいそうだと思うのだが、さてそんなヒロイン像の可否は……？

2人から3人へ……

クンフー連れ戻しの「命令」を受けた2人だったが、現代的な台湾の若者らしく（？）、とりあえず2人は台北に戻り、自由を満喫。そんな場合の行動は「女関係」と

決まっているが、うまく女の子をナンパしたつもりのシャオグエは逆に美人局つつもたせにあう始末……。

他方、アーチョウはずっと気にしていたシンシンの実家を訪ね、今は病院にいるとの言葉を頼りに病院を訪ね、やっと面会を果たすが、何と彼女は病院に勤務しているのではなく、精神病院の入院患者だった！ 日本は今、格差、格差と騒ぎ、競争社会に否定的だが、中国はもとより韓国や台湾は日本以上の厳しい競争社会。そして、今やアホバカ大学を含めて全員入学となった日本と違い、これらの国々では大学はエリートに行くべきところ……。したがって、そんな競争の中で疲れ果ててダウンしたり、中にはシンシンのように精神を病んだりする人間も出てくるわけだ……。

したがって、せっかくシンシンとの再会を果たしたアーチョウだったが、シンシンはアーチョウが誰かもわからないまま。ところが、何を思ったかシンシンは、面会を果たし帰ろうとしたアーチョウの後を追って病院を抜け出してきた。そのため仕方なく、アーチョウはシンシンを連れたままシャオグエと一緒に、クンフーの実家がある花蓮へ向かうことに……。ここから、2人ではなく、男女3人の奇妙な旅が始まったが……。

クンフーとの思いがけない再会は……？

この映画は「夢遊ハワイ」というタイトルどおり、すべての物語をあまり深刻に扱わず、どこかにユーモアを持たせマンガ的な扱いとしている……。そのため、精神を病んでいるシンシンとアーチョウ、シャオグエとのやりとりもどこかやさし気……。そしてそれは、脱走兵クンフーを連れ戻すという、本来なら命がけの重大な任務も、よく言えばユーモアを持って、悪く言えば何ともデタラメな軍規無視の視点(?)で描いている。

3人がクンフーと遭遇したのは、花蓮の海辺。銃を持ったクンフーからまともに銃を突きつけられたら3人が抵抗不能となるのは当然だが、捕まった後のやりとりを観ていると、どうもそんなギスギスした関係ではなさそう……。その証拠に、やっと脱出できたと思ったのに、小川の中に落ちてアップアップしているクンフーの姿を見ると、2人は川の中に飛び込んでクンフーを「救出」する始末。その後、釣った魚で食事をしたりする中、昔どおりの仲よし状態になった4人だったが……？

打ち上げ花火はホントに上がるの……？

そんな中、クンフーから聞かされた脱走の理由は実にたわいのないもので、やはり彼女絡みのもの。つまりクンフーは、自分で爆竹の火薬を使って打ち上げ花火を作り、それを彼女に捧げることによって、彼女の心を取り戻そうとしていたのだった。

小屋の中で必死にそれを作るクンフーを見ていると、その健気な姿に少ししみりとしてくるが、他方既に追手の憲兵たちはすぐ近くに来ている様子……。

花火を打ち上げる夜になり、アーチョウとシャオグエそしてシンシンの3人は真っ暗な道を歩いていたが、その時海辺では早くもパンパンという大きな音が。「あのバカが、先に勝手にやりやがって……」と思った3人だったが、実はそれは花火の音ではなく、銃声……。するとクンフーは……？

さて、海辺に並べられた打ち上げ花火は、本当に上げることができるのだろうか……？ そしてそれは、クンフーの彼女の心に届くのだろうか……？ そんなこんな出来事の中、4人のいや今やクンフーを除く3人の今年の夏の青春は静かに去っていかうとしていたが……！

2006(平成18)年 8月28日記